

追体験を通して学び合う中で、社会の見方・考え方を深める子ども

— 中学3年～「対立と合意」「公正と効率」について考えよう～の実践から —

1 単元のねらい

「消費税導入過程」の追体験を通して、合意形成のための視点をとらえ、社会の見方・考え方を深める。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

平成24年度完全実施となった新学習指導要領では、近現代の学習を一層重視し我が国の現代の特色をとらえさせる観点から独立させ、「現代の日本と世界」という大項目が新たにつくられた。この改訂を受け、1980年代半ばに生じたアメリカとの貿易摩擦の解消のため、政府が内需拡大政策をとり、公共事業の拡大を決断し、1980年代後半のバブル経済につながったことや、その結果赤字国債発行が膨らんだこと、その解決策として消費税が導入されたこと、1990年のバブル経済の崩壊、そこから始まった平成不況なども学習内容に加えることにした。

現代史でこれらの内容を学習した生徒たちは、「消費税の導入」という史実に対して「現在もずっと消費税は続いている。自分たち中学生まで払わなくてはならないような税をつくったのはひどいと思った。」「島根県出身の竹下登首相が消費税をはじめて導入したと知ってショックだ。」などと、島根県の中学生の視点から、消費税の導入に対して政府に批判的な意見をもつ生徒が多かった。

これまでの地理的分野と歴史的分野の学習では、生徒が知識を関連付け、構造立てをしながら社会事象の意味や意義について考察できる力の育成に重点を置いてきた。それらを基盤としながら、現代史の学習を終えた3年生には、公民的分野の学習において現在起きている社会事象について多面的多角的に判断し、よりよい社会をめざそうとする社会参画の力を培ってほしいと考えた。現在、消費税の増税が審議されている。この問題について、経済単元で取り上げたとき、自分の立場と政府の立場のみならず、社会背景や様々な立場の意見をふまえて多面的多角的に判断し、社会認識の深まりが見えることを期待していった。

(2) 本単元の内容と社会科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本単元について学習指導要領には、「社会生活における物事の決定の仕方、きまりの意義について考えさせ、現代社会をとらえる見方や考え方の基礎として、対立と合意、効率と公正などについて理解させる。」とあり、今後の公民の学習をすすめる上での政治や経済における原理を理解させる単元である。

人間は社会集団を形成し、そこに所属して生活している。そして、集団に所属する人は、一人一人個性があり、多様な考え方や価値観をもち、利害の違いもある。そこから意見の相違や紛争が生じる場合がある。このような「対立」が生じた場合、お互いが共に成り立ち合えるように、何らかの「合意」にいたる努力がなされる。このことから「対立」と「合意」は社会をとらえる見方や考え方の基礎的な概念であるといえる。また、合意の妥当性について判断することが社会的な見方や考え方を高めていくことにつながると考える。その際の判断の基準として「公正」と「効率」を用いたい。そのルールができる過程や内容は公正であるかどうかと、社会全体で無駄が少なく利益を上げることができるかの両面から検討する必要がある。「効率」

を求めるあまり「公正」を欠くきまりはよくない。しかし、「公正」のみを追求し、「効率」でないきまりも良いきまりとはいえない。「公正」と「効率」が矛盾する場合も少なくないが、これらの妥協点を探りながら集団としての合意点を探っていくことが大切である。

そのことについて考えていく題材として、今回は、平成元年に消費税が導入されるまでの様々な意見の対立と合意に至る過程を取り上げ、それを生徒が追体験することで、理解させたいと考えた。今までは、この単元を学習する際に、生徒にとって身近なところから、架空の課題を事例として取り上げ、問題解決のためのルールをつくらせ、その経験を通して、「対立と合意」「公正と効率」といった社会をつくる枠組みをとらえさせてきた。これらの実践では、合意形成を体験的に理解するためには、いかにして自分の立場になりきり、対立場面をつくることが重要になってくるが、架空の場面設定であることから、表面的な意見対立にしかならず、そのために、「対立と合意」「公正と効率」の概念形成が弱く、その後の経済や政治の学習につなげていくことが難しかった。よって、今回は、実際の史実を追体験させることにした。消費税の導入は史実として明らかであり、さらに導入時における国会での意見対立も論点をはっきりしており、「対立と合意」「公正と効率」という概念を生徒がつかみやすい題材と考えた。

(3) 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

これまで述べてきたように、単元全体を通して生徒たちに対立の構図が見えやすい教材として、平成元年の消費税導入の事例を取り上げた。この事例では、それぞれの社会的な立場から意見・論点が出されており、「公正と効率」の概念がとらえやすく、「公正」と「効率」が対立する状況を生んだ場面を設定していくことができる。第1次では、「消費税導入に対して、賛成や反対の意見があったのはどうしてだろうか」ということから消費税に関する問題を提起し、考えさせていく。そして、時代背景をとらえた上で、この問題がどうやって合意形成に至ったのかを知るために、当時の論点を調査し、それぞれ政党の主張をはっきりさせる活動を行う。主張の異なる立場をA党・B党・C党・D党というように4つの政党に分け、消費税導入についてのそれぞれの政党の主張をグループの共同作業で調べさせる。さらに、自分と同じ政党の主張を調べたメンバーで、その主張を整理し、メンバー全員が個々に発表できる準備をする活動を設定することを考えた。

第2次では、自分と異なる主張（対立する意見）を調べたメンバーで集まり、4～5人からなる模擬国会を開き、消費税導入の追体験をさせる。具体的には、各グループで調べた政党の立場で討論し、合意できそうな点と対立している点を確認する。この活動は、自分の担当している政党の主張をより深く理解したり、違った視点を発見したりする場面であり、教科構想で述べている「第1の学び合い」にあたる。「第1の学び合い」のふりかえりを見取り分析することで、生徒たちの見方の変容をとらえ授業ではたらきかけに反映させる。そして、それぞれの政党の主張について理解が深まったところで、対立している点に注目させ、再度「消費税導入はどうやって合意形成されたのだろうか」という問いを追求していく。

第2次の2時間目で「第2の学び合い」を行う。学級全体が同じ視点で学び合うために代表による公開討論（模擬国会）を行い、それぞれの政党の主張の対立している点について「公正と効率」の尺度表を使い整理する。この場面は学級全体で思考を練り上げていき、合意形成のための視点について気付かせる場面である。最後に、実際の消費税法が成立した過程を見ることによって意見の対立の解決には、他者の価値観を尊重し、「公正」と「効率」の両方を達成するための合意点を探しながら国会で合意形成され、対立が解決され、社会が動いていった事実を明らかにさせていくことを構想していった。

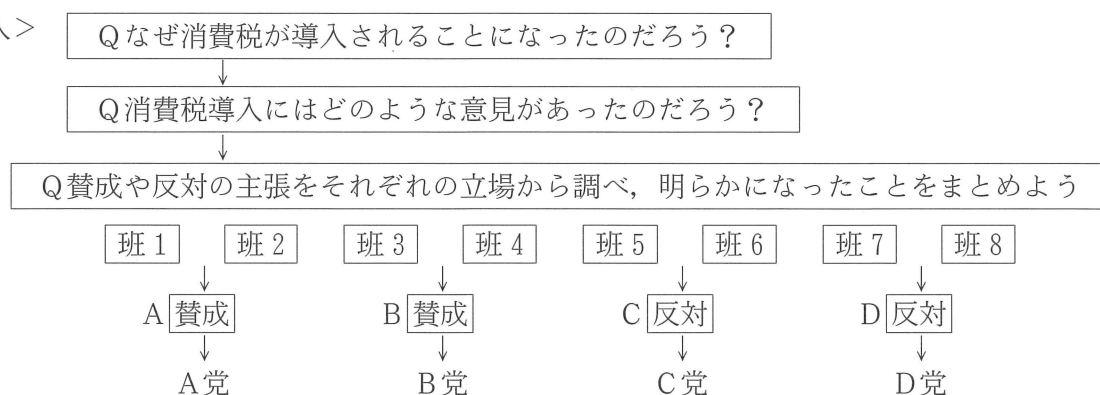
3 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は、学び合い）
1	1989年当時の社会のようすを調べよう。 政府や野党の立場に分かれて主張を調べよう。	1	<ul style="list-style-type: none"> 時代背景の整理をする。……少子高齢化，赤字財政に転落 消費税導入についての意見には，どのような意見があったのか確認する。……賛成する立場にも税率，実施時期の違い，消費税の用途の問題など様々な相違があったことを知る。
		2	<ul style="list-style-type: none"> 高所得者，低所得者，企業，労働組合などの代弁をする当時の政府と野党の立場に分かれて，それぞれの主張を調べ，明らかになったことをまとめる。
		3	
2	模擬国会で立場討論を行おう。 代表者の立場討論を「公正と効率」の視点で整理しよう。	4	<ul style="list-style-type: none"> 討論形式でそれぞれの主張を発表し，自分の調べた政党の主張と，他の政党の主張の違いを確認し，合意できそうな点と対立している点を確認し，ワークシートに記述する。 ◇「対立と合意」という視点でとらえることで，合意形成の障害になる点を明らかにする。（「第1の学び合い」）
		5	<ul style="list-style-type: none"> 代表者の立場討論を聞いて，「公正と効率」の尺度表を使い学級全体で，それぞれの政党の主張を整理する。 ◇学級全体で消費税導入問題について，「公正と効率」の視点で再考し，社会に対する見方・考え方を深める。（「第2の学び合い」）

4 授業の実際

<授業構想図>

<導入>



Q模擬国会で自分の調べた主張を発表しよう

○小委員会に分かれて各党の主張 …… 第1委員会～第8委員会

A 1	B 1	A 2	B 2	A 3	B 3	A 4	B 4
C 1	D 1	C 2	D 2	C 3	D 3	C 4	D 4
A 5	B 5	A 6	B 6	A 7	B 7	A 8	B 8
C 5	D 5	C 6	D 6	C 7	D 7	C 8	D 8

○委員会ごとに他の主張との違いを明らかにする

<合意できそうな点>と<対立している点>

Q合意形成の障害になる点を明らかにしよう… ……「第1の学び合い」

「公正と効率」の尺度表を使い学級全体で，それぞれの主張を整理しよう

「公正と効率」の視点で再考し，見方・考え方を深めよう ……「第2の学び合い」

(1) 1989年当時の社会のようすを調べよう

① 時代背景の整理

消費税が導入されたのは、竹下登内閣の時であったことを明らかにし、時代背景の整理を資料を活用して行った。少子高齢化への動き、赤字財政に転落など当時の社会情勢が浮かび上がってきた。

② 消費税導入についての意見の確認

大きく分ければ、賛成と反対の立場ということになるが、賛成する立場にも税率、実施時期の違い、消費税の使途の問題など様々な相違があることに生徒たちは驚きを覚え、問題の複雑さを実感したようだった。

(2) 政府や野党の立場に分かれて主張を調べよう

当時の資料を配付し、いろいろな立場の主張がとらえられるようにした。具体的には、高所得者、低所得者、企業、労働組合などの代弁をする当時の政府と野党の立場を四つに分かれて、それぞれの主張を調べ、明らかになったことをワークシートにまとめていった。

(3) 合意形成の障害になる点を明らかにしよう（「第1の学び合い」）

① 模擬国会（小委員会で討論会）

班ごとに一人一人が調べたことを政党の主張として整理していった。この作業（話し合い）が政党としての主張を整理する上で重要な活動となった。そして、小委員会を編成し、討論形式でそれぞれの主張を発表し、自分の調べた政党の主張と、他の政党の主張の違いを確認し、合意できそうな点と対立している点を確認し、ワークシートに記述した。

② 合意できそうな点と対立している点の吟味

「合意形成の障害となる点は何だろうか」という投げかけに対して、「対立と合意」という視点でとらえることに目が向き、合意形成の障害になる点をそれぞれの主張の立場からさらに他の主張を聞くことから考えが深まり、明らかにしようとする意見が次々と出て意見の絡み合いが見られた。

(4) 代表者の立場討論を「公正と効率」の視点で整理しよう（「第2の学び合い」）

この時間の具体的な学習内容は、「消費税導入問題を「公正と効率」といった合意形成のための視点でとらえ、社会に対する見方・考え方を深める」である。学習の流れと学習形態は、次の通りである。

(学習内容) (形態) (授業の実際)

<p>1 前時までの学習について確認し、本時の学習のめあてを確認する。</p>	<p>一斉 (全体)</p>	<p>前時までの学習の確認を行った。「合意形成の障害になる点を明らかにしよう」を想起させ、本時の学習のテーマにつなげていった。本時の学習テーマは、「消費税導入は、どうやって合意形成されたのだろうか」であった。</p> <p>.....</p> <ul style="list-style-type: none"> • 本時の学習内容を把握し、見通しをもつことができるように、前時までの学習を振り返った。4つの立場のそれぞれの代表として小委員会で主張を発表し、合意形成の障害になる点について考えたことを確認した。 • 主張の違いは、どこから生じるのか、合意できる点はないのか、前時の学び合いの視点を意識させることができた。
<p>2</p>	<p>一</p>	<p>4つの政党の主張</p>

それぞれのグループの代表による模擬国会を行う。

斉（全体）

- ・ A党 消費税導入賛成
- ・ B党 消費税導入賛成
- ・ C党 消費税導入反対
- ・ D党 消費税導入反対

.....

・ A党・B党・C党・D党の代表4名に、公開討論という形式でそれぞれの政党についての主張を発表させ、黒板にそれぞれの主張の違いが分かるように整理していくことを伝えた。生徒たちは、ワークシートにメモを取りながら発表に耳を傾けていった。質疑や応答も交えて行うことで、政党の主張を位置づけていくことができ、何が強調されている点でどんな立場の人々を代弁しているのかについての特色を確認することができた。また、合意への障害となる点についてもさらに意識することができた。

3 代表による模擬国会でのそれぞれの政党の主張を、「公正と効率」の視点から整理する。

一斉（全体）

「公正と効率」の尺度表を使い学級全体で、それぞれの政党の主張を整理する。

.....

- ・ 尺度として示したのは、「だれにとっても公平」であるのか、福祉財源不足の中で早期解決かゆっくり解決か、という二つの側面からのアプローチである。生徒たちは、それぞれの主張をどのようにとらえるのか考えを発表していった。
- ・ 4人の代表による公開討論（模擬国会）でのそれぞれの政党の主張を「公正と効率」の視点から整理していく中で、主張が対立しているように見えても、どの主張も財政赤字を解決するという同じ目的を達成するための主張であり、「公正」と「効率」の比率が違っているだけであることに気付いた発言をする生徒が出てきた。
- ・ 発表したことへの思いが尺度という形で可視化できるように、黒板に尺度表をし、表の中に一つずつ位置付けていった。生徒たちの発言は、すでに具体的事象一つ一つを別々のものとして取り上げるより、関連付けている内容が多く、逆に立ち位置を明らかにしていくことに視点をおいて考えるようにはたらかけていった。さらに、合意形成のための歩み寄りの視点を模索していった。

4 実際はどうやって合意していったのか知り、合意形成について考えたことを発表する。

一斉（全体）

- ・ 消費税国会といわれた1989年の消費税法可決の場面を記録映像で観ることによって、最終的には多数決で成立したことを確認する。
- ・ 生徒が国会の多数決のルールを知った上で、再度合意形成のために大切な視点を問うことで、生徒の思考をゆさぶる。

.....

- ・ VTRを用いて当時の社会の様子や国会での成立過程を再現していった。事実の映像で生徒たちにとって、具体的な理解につながった。消費税を成立させるためには定められた過程があり、合意のための話し合いがあり、歩み寄りのための努力があることを補足した。

		<p>・合意形成についての大切なことは何かと問い、ワークシートに考えをまとめる作業を行い、発表をしていった。</p> <p><ワークシートより></p> <p>○「公正」と「効率」のどちらか一方のみの考えではいけない。一つの政策により、不満に思ったり、立場が弱くなる人のことを考えて、どうやってそれを小さくするか考えないといけない。(生徒A)</p> <p>○みんなが自分の意見を言う機会が必要だ。決め方が「公正」でないと、内容がよくても納得できないと思う。(生徒B)</p> <p>○「公正」を重視するか「効率」を重視するか、それぞれの立場があり完全な合意は難しい。話し合うことで、歩み寄りや少しの不公平さを補う努力をしていなくてはならないと思う。(生徒C)</p>
--	--	--

5 成果と課題

第4時、第5時での思考力・判断力・表現力の評価を次のように設定していた。

次	時	学習活動	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
					A	B	C
2	4 5	消費税導入を「公正と効率」「対立と合意」という視点でとらえよう	合意形成のための重要な要素を「公正と効率」「対立と合意」視点から記述している。	ワークシート ふりかえり	合意形成のための重要な要素を「公正と効率」「対立と合意」視点からとらえ、場合分けや条件付きで記述している。	合意形成のための重要な要素を「公正と効率」「対立と合意」視点から記述している。	合意形成のための重要な要素を「公正と効率」「対立と合意」視点から記述していない。

これに照らし合わせた成果としては、社会科部で構想した「第1の学び合い」と「第2の学び合い」の設定ということである。当然であるが第1の学び合いがあって、第2の学び合いへと発展する。だが、第2の学び合いへ思考がつながるためには、学び合いの後の授業の見取りが大切になってくる。個々で設定した評価基準のもとに見取りをし、次の時間の授業に生かしていくことができた。第5時で行った公開討論（模擬国会）などは、より学び合いを深めるために、学級全体で「公正と効率」の視点から考えていくことを一人一人をとらえ、代表者を選ぶことなどに生かしていった。生徒たち一人一人の評価にもつながるが、教師の授業の指針としても授業を進めていく上で重要な取組となった。

また、課題として次の2点が考えられる。

1点目として学級全体での学び合いを可視化して進めるため尺度表を使うことを試みているが、尺度としての視点、視点に対する思いの強さを示す度合いが学習者にとってどの程度有効になっているかということである。

2点目としては教師のはたらきかけとして掘り下げることが大切であるが、本実践の中で学習課題が単元を貫くものであり、一人一人が同じ基準で考えることができるものであったかどうかということが十分でなかったように思われることである。掘り下げる場面において、「歩み寄りの視点」を構想していたがそこに至るまでの深め方が、学びをいかにするために重要ではないだろうか。

これらの課題をふまえ、今後も学年や学級の実態に合わせて指導を進めていきたい。

(文責 原 義昭)